

Title	番傘・風呂敷・書物(幸田成友著, 書物展望社版)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.173- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

番傘・風呂敷・書物

(幸田成友著
書物展望社版)

本書は幸田博士の書物に關する隨筆集である。博士より書物の話を聞き得ることは、博士に接する多くの人々の最も喜びとする所であらう。時々博士を取り圍んで聞く本の話はその巧みな話術に依て、一層門下生に深い印象を與へてゐる。博士の書物好きは小供の時からで、御茶水聖堂にあつたものと帝國圖書館に度々通はれたと言ふ。『晝間でも森閑として鶯の鳴聲が聞える程故、夜になると一倍の寂しさを加へ、残つてゐる少數の閱覽人は閱覽室の一隅に集まり、時折軽くゆらめく西洋蠟燭の光の下に、讀書三昧に入つたものである。』と少年の頃、經國美談を耽讀された當時を追憶されてゐる。爾來現在に至るまで博士は寸時も書物と離れない生活をされてゐるのである。博士の本好きは、所謂本道樂以上のものであらう。本道樂になるには、一に金、二に暇が是非必要であり、更に書物に對して正確な判斷を與へるだけの知識と經驗とを必要とすると博士は言はれてゐる。先の二つの必要條件を有する人は世間に必ずしも少いとは言はれないと思ふが、後の條件を有するものは、果して何人あるであらう。博士は正にこの兩者を併せ有しないとしても、後の條件の所有者たることは確かである。吾々は博士からその獨壇場とも言ふ可き書物に關する御話を

拜聽する毎に、世の本好きに之を傳へ度いと思ふことが度々であつた。本書の出版に依て、この希望の一部が達せられたことは、誠に喜ばしい事である。

本書は大體直接書物に關するもの、著者に關するもの、書物蒐集家に關するもの、圖書館、本屋に關するもの、澁澤氏に關するもの等を含んでゐる。どの一節を取つて見ても興味深く益せらるゝ所が多い。『五十年前の書價』『青柳の珍書會』等は古い本好きにとつては思ひ出深いものがあらうし、『缺本の話』には書物蒐集の苦心が何はれ、又『外題替』其他に於ては、出版者、編纂者等の不徳義、不誠實を憤慨せられ、書物複製の際の無意味の外題替を難ぜられ、特に大日本貨幣史の複製本及びその補録に關してするどい批評を加へられてゐる。『愚書退治』其他に於ける圖書館に對する注文及び激勵、登館者への苦言は、何れももつともと思はれるものであり、『歐洲の圖書館と古本屋』に關する話は有益且つ興味深く博士の獨壇場の感がある。『鎌倉大草紙について』『寛文版の書籍目録』『幕末の木活字版一二について』等は、何れも博士の書物に對する深い造詣と、すぐれた知識とを窺ひ得ると共に、古書の複製が如何に注意を要するものであるかを教へらるゝ。更に活字の平假名を今の如く一定しないで種々の平假名を用ひよと言ふ博士の主張は、時々これに閉口してゐる吾々にとつては全く同感である。本書に挿入せられてゐる平假名の表を見ても、その多いのに驚く程である。『澁澤篤太夫の日記と手紙』に於ては、子爵の私の日記に依り、慶應四年歐洲よりの歸朝前後の動靜を記し、夫人に宛てた手紙に依て、その人となりを述べられてゐる。中でも

パリよりの一通の如きは、『情あり、理あり、涙あり、笑いあり。云々』と博士も言はれてゐる如く、讀む人をして感動せしむるものがある。最後に子爵の傳記資料編纂に就いて述べられてゐる項は、史料の蒐集編纂を如何になすべきであるかを實例を以て示されたもので後學者を裨益する點が多々存すると思ふ。此外、錢湯の話もあり、時にふれた隨筆もあり、又英語、國漢文の教授に對するすぐれた意見も述べられてゐる。

面白く讀めて且つ益せらるゝ所の最も多いものが最も價値ある書物であらう。以上の簡単な紹介に依ては、本書の面白みも有益さも傳へることが出来ないけれども、かゝる意味に於て本書は必ず讀者に満足を與へるものと思ふ。風呂敷と書物とを示したこつた装釘、挿入された種々の圖版等すべて博士の書物に對するこまかい愛著心を感じしむるものがある。書物を好む人、好まざる人共に一讀すべき近來の好著である。(今宮新)

歴史と辯證法 (高橋里美著 岩波書店)

本書は「全體の立場」「體驗と存在」につゞく高橋教授の第三論文集である、收むるところ「歴史に於ける辯證法」「歴史の分散性」「理想主義の人生觀」「西田哲學について」「種の論理について」の五篇である、右の中歴史に直接關係するものは前二者であり、他は辯證法に關するものである。

さて第二論文「歴史の分散性」に於て教授は歴史的存在の諸層と其等の間の分散的聯關を明かにしやうと努められる、教授によ

れば廣義の歴史は非本來的な歴史としての自然史と本來的な歴史としての人類史に分たれ、しかも人類史は更に政治經濟史と精神文化史とに細分される、そしてこの三つの歴史層は分散性と限定性を示してゐる。ここに所謂歴史層の限定性とは相互限定性であつて、觀念辯證法や唯物辯證法の主張する如く決して一方的限定ではない、そしてこの限定の仕方或は反映の形式は教授によれば不規則分散的である。其は並行的に行はれるのではなく多くは凹凸的に行はれるのである、自然史の層が一樣に政治經濟史の層を限定し、其が又同様な仕方で精神文化史を限定すると云ふ如きものではなくして、一つの歴史層が他の歴史層を強く突破する如き仕方限定することもあれば、或は其とは反對に他の層に對して極めて無頓着に游離的に自己の進行を辿り、あまり影響し合はぬこともある、これは其等が分散的であるからである、かかる歴史の分散性と云ふ如きことは極めて常識的であるとの誹をまぬかれぬかも知れないが、然し常識の世界を其の特色に於て把握することは、常識についての哲學ではあつても、必ずしも所謂常識哲學として決して輕蔑せらるべきものではない、勿論哲學は單なる常識に止まるべきではないが、然し常識をも説明し得るものでなければならぬ。教授は歴史の分散性なる常識に哲學的根據を與へやうと試みたと云ふのである。歴史は分散的存在なのである。勿論教授は歴史に連續的生成を否定するのではなく、寧ろ此を歴史の基層と考へてゐられる如くであるが、具體的な歴史はこの根本的生成——これとても嚴密には第一次的分散性を有する——を基層とする重層的存在なのである。然らば分散性を以つて歴史の